

# 母親の養育態度と乳児期の気質が幼児の不安傾向に及ぼす影響： 家庭の雰囲気を経介要因として

高橋 靖子\* 野々部 友香\*\*

\*心理講座

\*\*江南厚生病院

## The Influence of Mothers' Child-Rearing Attitude and Temperament in Infancy on Children's Anxiety: Family Function as a Mediating Factor

Yasuko TAKAHASHI\* and Yuka NONOBE\*\*

\*Department of Psychology, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

\*\*Konan Kosei Hospital, Konan 483-8704, Japan

### 問題と目的

現代の子どもが抱える心理的問題、不登校やひきこもり、場面緘黙などに子どもの不安が関係することが指摘されている(齊藤, 2015)。

児童期における不安障害の有病率は約8~12%であり(Anderson, Williams, McGee, & Silva, 1987), 近年関心が高まっている。しかし, 専門的介入を受けていない一般児童の中にも, 不安障害傾向の児童が多くいることが知られている(American Academy of Child and Adolescent Psychiatry, 1997)。このような不安の高い子どもは, 学級集団の中でうまく自分を表現することができない, 仲間との関わりにおいて協調的な態度で接することができないなど, 教育現場において不適応を生じる可能性がある。

ただ, このような子どもの不安傾向を扱った研究は, 欧米と比べて, 日本では乳幼児の内向性が見落とされやすい文化的背景もあり数少ない。また, 研究の多くは, 児童期が対象であり, 幼児期については数少ない。しかし, 石川・坂野(2005)は, 児童期に不安障害傾向を示す子どもは, 現在社会的場面において不適応を示すだけでなく, 成人後も継続する可能性が高いことを示唆しており, 子どもの不安障害傾向には早期の援助や介入が必要であると考えられる。このことから, 一般の子どもの不安傾向を不安障害のスペクトラムの視点から捉えることによって, 不安障害の子どもの発症プロセスや関連要因を明らかにし, 予防的介入に役立てられる(西澤, 2011)。

そこで, 本研究では, 幼児期における不安傾向の調査を行い, 不安傾向に起因する問題を抱える子どもに

対する援助や介入への示唆を得たい。

幼児の不安傾向と関連する主な要因の一つとして, 乳児期の気質が挙げられる。気質とは, 生得的, 体質的な基盤を持つ個人の行動特徴であり, ある程度の時間的連続性をもつと考えられている。同時に, その行動特徴は環境の中で異なる経験を通じ, 環境との相互交渉を通して変化し得るものでもある(武井・寺崎, 2005)。これまでの研究でも, 子どもの気質や発達上の問題, そして育児ストレスなど, 母親の精神的健康との関連が指摘されている。母親が知覚する乳児の気質が親の養育態度や行動に与える影響に関して, 上村・田島(1988)は周期性, 応答性が低く, 子どもを扱いにくい気質と捉える母親は, 育児における負担感や不安感が強く, 育児にネガティブなイメージを強くもつことを明らかにした。以上より, 新奇場面への順応の悪さや扱いにくさといった乳児期の気質が幼児期の不安に直接結びつくと考えられる。

次に, 不安傾向の環境因の一つとして, 親の養育態度を取り上げる。子どもの特性と母親の養育態度との関連について, これまで多くの研究がある。例えば, 酒井(2004)は親が子どもを心配しすぎて過保護になると, 子どもは自分の能力について自信を持つことが難しく, 新しい挑戦や物事に積極的に取り組む意識を持ちにくくなると指摘している。

一般的に, 親子関係は子どもが生まれてから初めて築く対人関係であり, 家庭内での関係を基盤として, その後の仲間関係など他の対人関係を構築していく。本研究では, 子どもと長時間密接に関与する母親との関係に着目する。例えば, 幼児期に受容的な養育を受けている子どもは, 母親を安全基地と認知しながら行

動することができるため、不安が低いと考えられる。一方で、統制的な養育を受けている子どもは、母親だけでなく仲間との関わり方に自信を持たず、不安が高まると考えられる。さらに、過干渉と放任が混在するような一貫性のない養育を受けている子どもは、自分の行動に対して母親がどのように反応するのかを過剰に気にするようになり、同様に社会的場面においても他者の反応を過度に気にするなど、不安が高くなる可能性がある。

一方、母親の養育態度や幼児期の不安の背景要因として、家族関係のあり方やその家庭の雰囲気も影響を与えると考えられる。子どもにとっての家族とは、生命・生活の維持と健康の増進をはかり、心身の成長を促進し、心理的・社会的な問題の解決に取り組むべき場所として存在し、安全基地として社会に行動を広げさせるものである(杉溪, 2004)。家族関係のあり方や家庭の雰囲気を把握するための枠組みとして、家族システムが挙げられるが、その研究において代表的なOlson (1986) の円環モデルでは、家族の機能度を「凝集性」と「適応性」の2つの次元から捉えており、この両次元を促進させる「コミュニケーション」の働きの重要性を指摘している。西出(1993)は、それに加えて日本の家庭の特徴についても考慮し、家族アセスメントインベントリーの開発を行った。加えて、中学生とその親を対象に子どもの抑うつ傾向と家族システムの機能状態の関連を検討し、母親の家族システムの機能状態の捉え方が、子どもの捉え方とどう結びつくかによって、子どもの抑うつ感が増減する傾向があることを示した(西出・夏野, 1997)。また、菅原・八木下・詫摩・小泉・瀬地山・菅原・北村(2002)は、夫婦関係が家族機能と両親の養育態度を媒介して児童期の子どもの抑うつ傾向と関連するかを調査した。その結果、夫婦間の愛情の強さと子どもに対する態度の暖かさや過干渉態度との間に有意な関連があることが示された。つまり、子どもの特性には、母親から子どもに対する関わりやしつけという一方向的な働きかけだけでなく、それぞれの家族成員がその家庭の雰囲気をどのように認知し、日々生活しているかということも重要であろう。

本研究の仮説として、家庭内で親密でコミュニケーションが円滑である場合に、母親は子どもに対して暖かな気持ちで愛情深く接する。そして、そのような状況では、子どもが不安を感じるような出来事であっても、家庭の良好な雰囲気や受容的な養育に支えられてすぐに回復できると考えられる。一方で、家族間の情緒的な結びつきが弱く、家族関係が健全に機能していない場合に、母親は子どもに対して場当たりの関わりをすべしと考えられ、子どもの情緒的な安定性を脅かすことが予測される。また、その不安に対して親がネガティブに反応すると考えられるため、悪循環を起こ

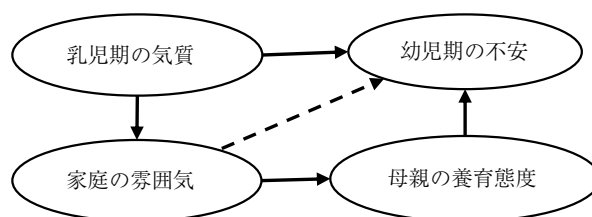


Figure 1 本研究のモデル図

しやすいと推測される。さらに、家庭内のルールが厳格すぎたり、家族システムが硬直している場合に、母親は子どもに対して一方的な押し付けに近い厳しいしつけを行うと考えられる。そのような状況では、母親は子どもの精神的な変化に気付かず、柔軟に対応できないと考えられるため、子どもの不安が高くなると予想される。

以上より、本研究の目的として、健全な幼児の不安に関して、子どもの気質だけでなく母親自身が認知する養育態度が関連すること、そしてそれらを家庭の雰囲気が媒介するかどうかについて検討する。具体的には、乳児期の気質が、幼児期の不安に直接関連するだけでなく、母親の養育態度や家族の雰囲気に影響を与え、さらにその養育態度を媒介して子どもの不安を決定づけると考える。母親の養育態度と家族システムの機能状態、そして子どもの生得的な気質に注目し、不安の規定要因を明らかにする(Figure 1)。

## 方法

### 調査対象者

愛知県内の幼稚園、保育所、インターナショナルプリスクールに在籍する2~6歳(平均月齢59.98ヶ月,  $SD=12.90$ ,  $range:25\sim83$ )の子どもを持つ母親246名(平均36.60歳,  $SD=4.20$ ,  $range:25\sim47$ , 不明4名)を分析の対象とした。きょうだいがいる場合は、年長の未就学児を対象に回答を依頼した。

### 手続き

A市所在のNPO法人子育て支援施設に調査を依頼し実施した。施設を利用している対象年齢(2~6歳)の子どもを持つ母親に対し、調査者が直接依頼し、その場で回答を得た。また、A市の幼稚園・B市の保育所・C市の認可外保育所の3施設に調査を依頼し、担任による保護者への質問紙配布および回収を依頼した。他にも、対象年齢の子どもを持つ保護者に、知人を通じて質問紙を配布し回答を依頼した。調査時期は、2016年10・11月であった。

### 調査内容

#### 1. フェイスシート

母親の年齢、子どもの年齢、性別、きょうだい数、

出生順位、家族構成、幼稚園・保育所への入園時期、母親の勤労形態について尋ねた。

## 2. 幼児期の不安

「改訂版幼児用不安傾向評定尺度」(西澤, 2011)のうち、「社会不安」、「全般性不安」、「分離不安」の3因子、24項目、5件法を使用した。

## 3. 母親の養育態度

「養育態度尺度」(森下・森下, 2006)の22項目(5件法)を使用した。この尺度は、「統制的関わり」、「受容的関わり」、「一貫性のなさ」の3因子から構成される。

## 4. 家庭の雰囲気

「家族アセスメントインベントリー」(西出, 1993)30項目(4件法)のうち、心理学専門の研究者1名と心理学を専攻する大学生2名の協議の結果、因子負荷量が低い項目や因子ごとの内容を適当に表していないと考えられる16項目を省き、14項目を使用した。

## 5. 子どもの気質

「日本語版 Revised Infant Temperament Questionnaire (RITQ)」(佐藤, 1988)を基にした水野(1998)の因子分析を参考に「行動的抑制傾向」、「順応の悪さ」、「世話のしにくさ」の3因子ごとに因子負荷量の上位3項目を選択した。これらの項目の文末を過去形に変え、1歳時点での子どもの気質を回想するよう指示し、4件法で回答を求めた。

## 倫理的配慮

いずれも回答は無記名で行われ、調査への協力は任意であり、協力しなかった場合にも不利益は一切生じないことを質問紙及び依頼文に明記した。提出の際は、封筒に封入し、調査者以外が回答を見ることができないよう配慮した。

## 結果

### 1. 各尺度の因子分析

初めに、幼児用不安傾向尺度、母親の養育態度尺度、家庭の雰囲気に関する尺度、子どもの気質尺度について各項目の平均値及び標準偏差を算出した。

天井効果のみられた項目について、母親の養育態度尺度では、「自分にとって、子どもが何より大切だ」「子どもと一緒に、外出や旅行をするのが好きだ」の2項目を除外し、家庭の雰囲気に関する尺度では「私の家庭は、心のよりどころにできる場所である」の1項目を除外した。

次に各尺度に対して因子分析(主因子法・プロマックス回転)を行い、因子負荷量.35以上を基準として、固有値の減衰状況と解釈可能性より項目を抽出した。幼児用不安傾向尺度24項目に対しては、因子負荷量の基準を満たさなかった1項目(「何か気になること

があると、大人にたびたび確かめなければ気のすまないことがある)」を除外して再度因子分析を行い、3因子23項目を採用した(Table 1)。3因子とも項目の構成が既存の因子とほぼ一致していたため、「社会不安」( $\alpha=.848$ )、「分離不安」( $\alpha=.812$ )、「全般性不安」( $\alpha=.821$ )の因子名をそのまま採用した。

母親の養育態度尺度20項目に対しては、因子負荷量の基準を満たさなかった1項目(「子どもの悩みや心配事を理解している。」)を除外して再度因子分析を行った結果、3因子19項目を採用した。3因子とも構成項目が既存の尺度のものとほぼ一致していたため、「統制的関わり」( $\alpha=.781$ )、「受容的関わり」( $\alpha=.660$ )、「一貫性のなさ」( $\alpha=.711$ )の因子名をそのまま使用した。

家庭の雰囲気に関する尺度13項目に対しては、因子負荷量の基準を満たさなかった1項目(「私の家族はみんなそれぞれに、てんではばらばらな方である」)と、2因子にわたって高い因子負荷量を示した1項目(「私の家では、みんなが自分の考えをはっきりと口に出して言いやすい」)を除外して再度因子分析を行った結果、3因子11項目を採用した。第1因子は「私の家族は温かく明るい感じがする」など自分の家族を肯定的に捉えている7項目より構成され、「家族への肯定的評価」( $\alpha=.813$ )と命名した。第2因子は「私の家族の中では、きまりを守ることがとても大切にされている」など2項目より構成され、「家族内ルール」( $\alpha=.588$ )と命名した。第3因子は「私の家では、いったんこうと決めたことを変えるのは難しい(逆転項目)」など2項目より構成され、「家族の柔軟性」( $\alpha=.509$ )と命名した。

子どもの気質尺度については、2因子が抽出された。第1因子は「知らない人に会ったときは、15分たっても様子をうかがったり、こわがったりしていた」など6項目より構成され、「順応の低さ」( $\alpha=.809$ )と命名した。第2因子は「髪をとかしたり、顔を洗ったりしてもらった間、機嫌よくしていた(逆転項目)」など3項目より構成され、「世話のしにくさ」( $\alpha=.700$ )と命名した。

### 2. 性別、出生順位、年齢による各尺度の差異の検討

次に、子どもの性差を検討するため、幼児期の不安傾向、母親の養育態度、家庭の雰囲気、子どもの気質各尺度について*t*検定を行ったところ、いずれについても有意差はみられなかった。次に、子どもの出生順位による差異(第1子か第2子以降か)を検定したところ、母親の養育態度得点の「受容的関わり」および子どもの気質得点の「世話のしにくさ」において、第1子は第2子以降に比べて有意に高いことが示された( $t(244)=2.23, p<.05; t(244)=2.32, p<.05$ )。しかし、幼児期の不安傾向得点では有意差がみられなかった。そのため、以降の分析では性差および出生順位を考慮せず実施した。

Table 1 幼児用不安傾向尺度の因子分析

項目	F1	F2	F3
<b>F1: 社会不安 (<math>\alpha=.848</math>)</b>			
2 みんなの前で話をするのが苦手である。	.752	.031	-.063
19 幼稚園・保育園ではおしゃべりなほうだ。(※)	.695	-.080	.017
3 何か新しいことを始めるとき、しりごみしてなかなか始められない。	.638	.039	.038
9 担任の保育者に対して、自分から話しかけることが多い。(※)	.626	-.266	-.008
8 なかなか遊びに入らず、友達のしているのを見ていることが多い。	.602	.009	.036
18 行事や当番など、新しい活動や状況に慣れるのに時間がかかる。	.588	.199	-.006
20 仲の良い友達以外の友達と話しているのをあまり見かけない。	.553	-.056	-.059
5 初めて会う人に話しかけられても、答えられることが多い。(※)	.498	-.080	-.050
13 今まで経験したことのない行事や遊びでも、ためらわずすぐに入り込める。(※)	.491	.038	.118
4 園全体やクラスでの活動の際には、緊張して不安そうな表情になる。	.438	.192	.201
<b>F2: 分離不安 (<math>\alpha=.812</math>)</b>			
1 保護者から離れると、泣いたり恐がったりする。	-.116	.813	-.038
2 保護者にまともなついたり、後追いをすることはあまりない。(※)	.028	.665	-.069
12 登園時に保護者と離れにくく、泣くことが多い。	-.082	.627	-.054
16 特に理由はなさそうなのに、恐がって泣いたり保護者から離れにくくなるのがよくある。	-.124	.581	.193
17 初めての場所に行ったとき、なかなか保護者のそばを離れようとしなない。	.314	.566	-.063
15 健康診断や予防注射の際には落ち着きがなくなり、保護者から離れなくなったり泣いたりする。	-.163	.547	.069
14 たくさんの人が集まる場所に行くと、保護者から離れなくなることがよくある。	.332	.477	-.081
<b>F3: 全般性不安 (<math>\alpha=.821</math>)</b>			
11 何か悪いことが起きるのではないかと心配することが多い。	-.171	.107	.824
6 自分や家族に何か悪いことが起きないかと心配する。	-.276	.055	.782
7 失敗や間違いをしてしまうのではないかと心配する。	.255	-.111	.656
24 いろいろなことを、くよくよ気にすることが多い。	.114	-.077	.593
22 友達からどう見られているかを気にすることが多い。	.114	-.066	.550
23 神経質や心配性だと感じることもある。	.213	.035	.496
	因子間相関	F1	
		F2	.604
		F3	.411
			.356

※は逆転項目

また、子どもの年齢差を検討するため、年齢を独立変数として、4つの尺度を従属変数とする一要因分散分析を行った。その際、2歳児は9名と少数であったため、3歳児に含めることとした。その結果、幼児期の不安傾向得点に注目すると、「分離不安」において群間に有意差が示されたため ( $F(3, 242)=4.61, p<.01$ ), TukeyのHSD法による多重比較によると、2・3歳児は5歳児、6歳児と比べて有意に高いことが示された(それぞれ  $MSe=0.12, p<.01$ ;  $MSe=0.13, p<.05$ )。また、「全般性不安」においても群間に有意な差が示されたため ( $F(3, 242)=3.38, p<.05$ ), TukeyのHSD法による多重比較を行ったところ、6歳児は2・3歳児、4歳児と比

べて有意に高いことが示された(それぞれ  $MSe=0.14, p<.05$ ;  $MSe=0.12, p<.05$ )。これらの結果から、4歳児と5歳児の間に不安傾向に関する発達の差異が想定されたため、以降の分析は2-4歳と5-6歳の2群に分けて行った。

### 3. 仮説モデルのパス解析

最後に、幼児期の不安傾向の3つの下位尺度に対して、年齢層によって、母親の養育態度、家庭の雰囲気、乳児期の気質の各変数がどのように影響を与えているのかを検討した。各変数間の相関係数とモデル図を基にして、乳幼児期の気質が養育態度および家族の雰囲気

気を経由して各不安に至るパス図について、各下位尺度を観測変数として探索的に作成した。共分散構造分析を用いて年齢層ごとの2集団による多母集団比較を3つの不安のモデルに対して行った。

「社会不安」に関して、養育態度から不安と関連するという仮説に沿って、「一貫性のなさ」から「社会不安」へのパスの推定値についてパラメーター間の差に対する検定を行ったところ、有意でなかった ( $z=-.839$ )。「分離不安」に関して、「一貫性のなさ」および「家族の柔軟性」から「分離不安」へのパスの推定値についてパラメーター間の差に対する検定が有意であった（それぞれ  $z=-2.41$ ,  $z=-2.62$ ）。そして、「全般性不安」に関して、「一貫性のなさ」および「家族への肯定的評価」から「全般性不安」へのパスの推定値についてパラメーター間の差に対する検定を行ったところ、有意とならなかった ( $z=-1.81$ ,  $z=-0.63$ )。

次に、3つの不安モデルに対して、年齢層によって上記のパスと気質間の共分散に差がないとするモデル(モデル1)と、差があるとするモデル(モデル2)を設定しモデル比較を行った。AIC, BCCの値と $\chi^2$  difference-testの結果より、モデル2の当てはまりがよいことが示された。これらの結果より、いずれのモデルも年齢層の規定要因に差がみられることが明らかになった。

不安に関する3つのモデルの適合度を確認したところ、各指標は良好な数値を示した (Figure 2-Figure 4, 誤差の表記は省略)。これらのモデルの共通点として、2-4歳と5-6歳の年齢層は共に、各不安傾向に対して乳児期の気質の「順応の低さ」からの有意な正のパスがみられた。また、「社会不安」および「全般性不安」のモデルに関しては、気質の「世話のしにくさ」から養育態度の「一貫性のなさ」を経由して不安に至る正のパスがみられた。

年齢層による変化をみると、「分離不安」のモデルでは、2-4歳において「家族の柔軟性」から「分離不安」への有意な負のパスがみられたが、5-6歳にはみられなくなった。その一方で、5-6歳では、2-4歳でみられなかった「一貫性のなさ」から「分離不安」への有意な正のパスがみとめられた (Figure 3)。

また、「全般性不安」のモデルでは、2-4歳において「家族への肯定的評価」から「全般性不安」への有意な負のパスがみられたが、5-6歳にはみられなくなった。その一方で、5-6歳では、2-4歳でみられなかった「一貫性のなさ」から「全般性不安」への有意な正のパスがみとめられた (Figure 4)。

## 考察

### 1. 子どもの年齢における差異

不安傾向の下位尺度について、幼児の属性のうち、年齢における差異を検討した。その結果、「社会不安」

については、年齢差がみられなかった。西澤 (2011) は、年少児、年中児の方が、年長児よりも社会不安が高いと報告し、本研究の結果とは異なった。

一方で、「分離不安」について、2・3歳児は5歳児および6歳児と比べて有意に高いことが示された。これは、学年が低いほど分離不安が高いという西澤(2011)の結果と一致した。分離不安は、愛着対象の物理的不在によって乳幼児の不安を喚起する現象であるが、2歳以降は子どもの心の中で愛着対象が徐々に永続性を持つようになり、一貫したイメージが内在化する時期である (Mahler, 1975 高橋・織田・浜畑訳, 2001)。つまり、年長になると母親の物理的不在により乳幼児が不安を感じても、内的な母親像は揺るがずそのイメージによって慰められることが想定できる。分離不安の問題は単に年齢の要因だけでなく、母親との分離経験の頻度や分離時間の長さ、幼稚園教諭や保育士といった代理者の存在の有無が関係する (野呂, 1994)。入園などにより母親との分離を経験する一方で、新たに担任やクラスメイトとの人間関係が構築されることにより、乳幼児の分離不安は徐々に減少すると考えられる。

また、「全般性不安」について、6歳児は2・3歳児および4歳児と比べて有意に高いことが示された。これは、年長児の方が年少・年中児よりも全般性不安が高いとする西澤(2011)の結果と一致した。全般性不安の項目は、「自分や家族に何か悪いことが起きないかと心配する」「友達からどう見られているかを気にすることが多い」など、物事の因果関係を理解し始め、自分自身や周囲への関心が芽生える一方で、不合理な考えに捉われることによる不安を表しているものが多い。成長に伴い、外的な自己意識や周囲への観察力が高まる一方で、合理的・批判的思考が未発達であることから、全般性不安が高くなると考えられる。

### 2. 母親の養育態度、家庭の雰囲気、乳児期の気質が幼児期の不安傾向に及ぼす影響の検討

幼児期の不安傾向に対して、母親の養育態度、家庭の雰囲気、乳児期の気質の各変数が年齢層によってどのように影響を与えているのかを検討するために、多母集団比較を実施した。

「分離不安」に関して、2-4歳では、「家族の柔軟性」との間に負の関連が示された。「家族の柔軟性」の項目は、「私の家では、いったんこうと決めたことを変えるのは難しい (逆転項目)」「私の家ではお互いに気持ちをぶつけることができない (逆転項目)」といった、家庭内でのコミュニケーションを通じて、状況に応じた柔軟な対応ができるかどうかを尋ねるものである。数井・無藤・園田 (1996) は、家族で円滑なコミュニケーションがとれ、凝集性や柔軟性が適度に保たれ、家族への評価が肯定的である状態が、夫婦関係の良好

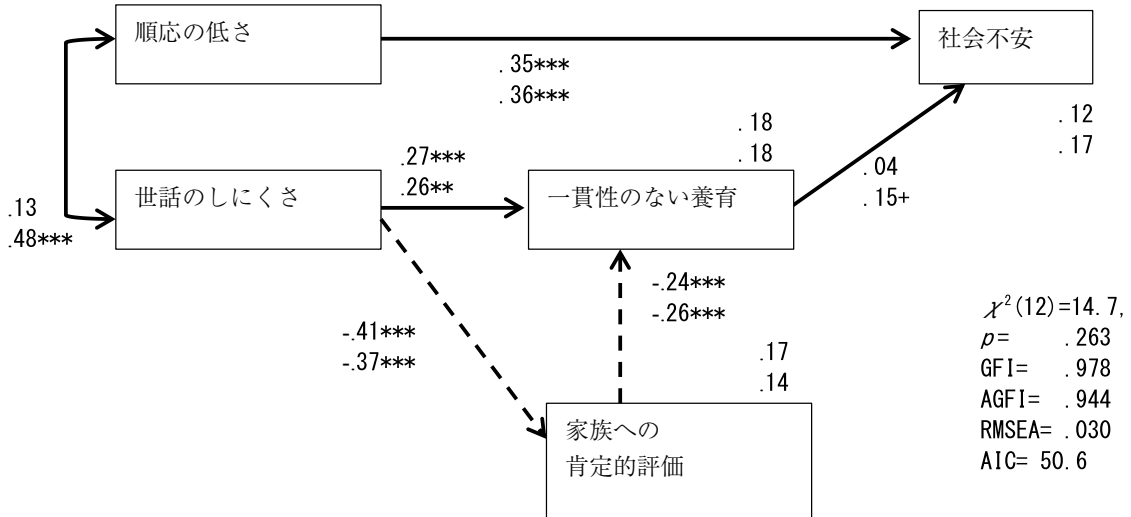


Figure 2 「社会不安」のパス図

(上段は2-4歳, 下段に5-6歳を示した。) \*\*\* $p<.001$ , \*\* $p<.01$ , + $p<.10$

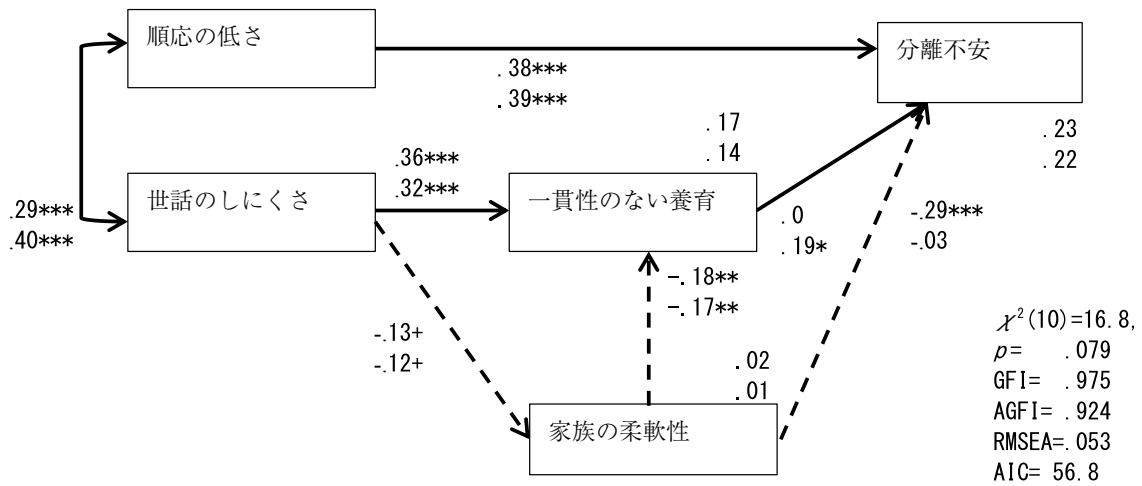


Figure 3 「分離不安」のパス図

(上段は2-4歳, 下段に5-6歳を示した。) \*\*\* $p<.001$ , \*\* $p<.01$ , \* $p<.05$ , + $p<.10$

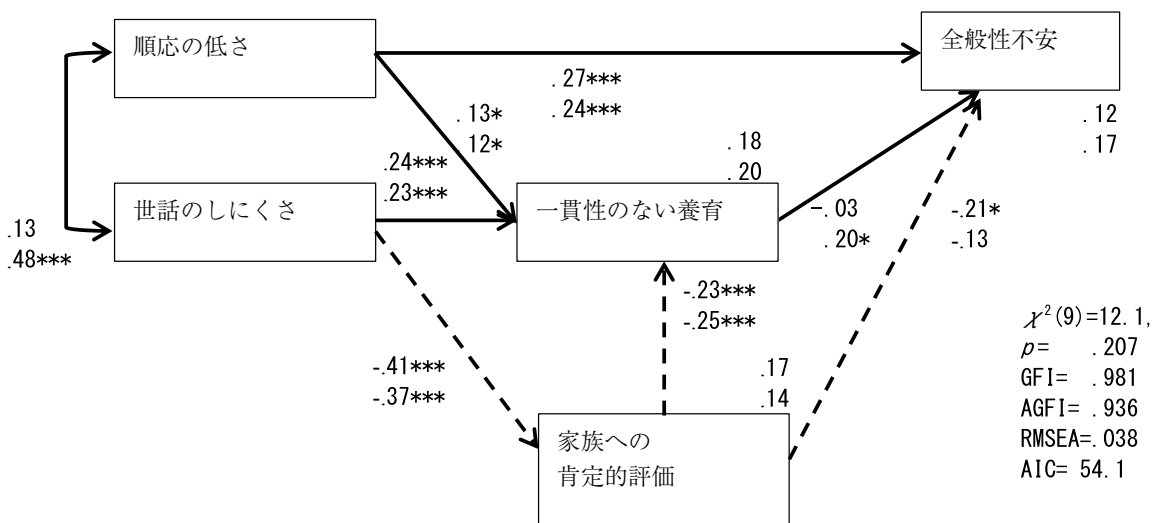


Figure 4 「全般性不安」のパス図

(上段は2-4歳, 下段に5-6歳を示した。) \*\*\* $p<.001$ , \* $p<.05$

さや親ストレスの軽減と関連しており、特に家族の柔軟性は子どもの愛着の安定型と関連することを示している。また、藤森・眞榮城・八木下・菅原（1998）は、子どもがネガティブなライフイベントを体験しても、家庭の雰囲気が良く凝集性が高ければ、子どもの抑うつ傾向が低いレベルにとどまることを示している。本研究において、家族の柔軟性と分離不安との間に負の関連が示されたことは、藤森らの結果と同様の傾向を示すものである。2-4歳においては、母親の養育態度ではなく、家庭の雰囲気が幼児期の不安傾向に直接的な影響を及ぼすプロセスが示されたことより、低年齢は特に家族関係が健全に機能しているかどうかという家族システムの視点から考えることの重要性が示唆された。

また、「全般性不安」に関して、5-6歳では、母親による家族への評価が否定的である場合に、一貫性のない養育を媒介して子どもの全般性不安が高くなることが示された。森下・森下（2006）は、女兒のみに関してで、母親の養育態度の「一貫性のなさ」と子どもの「情緒安定性」が負の相互作用を及ぼしていることを明らかにしている。この結果を踏まえると、もともとの気質による影響はあるものの、一貫性のない養育によって、自分の行動に対して母親がどのように反応するのかを気にして失敗や間違いを過度に恐れるようになることから、子どもの情緒が安定せず、全般性不安が高くなることが推察される。また、臨床研究においては、親の不安障害がその育児様式を媒介して子どもの不安障害と関連するという報告もある（Donovan & Spence, 2000）。子どもの不安を引き起こす養育の不安定さの背景には、親自身の不安の強さも否定できない。

「社会不安」に関して、「順応の低さ」が直接に関連しており、母親の養育態度や家庭の雰囲気とはほとんど関連がみられなかった。このことから、「社会不安」は、家庭内の要因というよりも本人の気質に由来する側面が大きいと考えられる。また、社会不安自体が、社会的場面、主に園生活での人見知りや自己主張への不安や緊張を査定するものであり、「分離不安」や「全般性不安」で確認されたような、家庭による影響が少なくなったといえる。

結果的に、不安傾向の下位分類において、その発生機序が一部で異なることが示唆された。前述のように、分離不安自体は多くの健常な乳幼児が経験する発達過程の一つであり、一律に臨床的な問題としてとらえることは難しい。しかし、本研究においても、西澤（2011）が指摘するように「社会不安」と「分離不安」の因子間に高い正の相関がみられた。元来の順応性の低さにより社会不安傾向が強まった子どもが、親の養育や雰囲気などの家庭内要因によって連動して分離不安も高まりやすいことが想定される。あるいは、分離

不安によって社会との関わりが阻害されやすく、成熟不足により社会不安に至るというプロセスも推察されるため、注意深く関与する必要がある。

### 3. 本研究のまとめと今後の課題

本研究では、年齢層ごとの母親の養育態度、家庭の雰囲気、子どもの気質と幼児期の不安傾向との関係を検討した結果、どの年齢層においても、1歳時点での順応の低さと幼児期の不安傾向との関連がみられた。それだけでなく、2-4歳と5-6歳では家族機能が幼児期の不安傾向に与える影響に差異がみられた。2-4歳の分離不安については、家族の柔軟性が低い場合に高くなった。また、2-4歳の全般性不安については、母親による家族への評価が否定的である場合に高くなることが示された。一方で、5-6歳になると、母親が家族に否定的な評価を行う場合に、一貫性のない養育を媒介して子どもの全般性不安が高まることが示された。そして、家族の柔軟性が低い場合に、一貫性のない養育を媒介して子どもの分離不安が高くなることが示された。このことから、2-4歳では家庭の雰囲気から不安傾向への直接的な影響がみられるが、5-6歳になると母親の養育態度が家庭の雰囲気と不安傾向を媒介することが示唆された。

このような年齢層によるプロセスの差異について、家族システムが適切に機能していない家庭では、母親の対応に不安や迷いが生じやすく、それが子どもに伝わってネガティブな影響を与えることが推察される。また、そのようなプロセスが長期化する中、家庭内の母親と子どものペアが情緒的な結びつきを強固にしていき、結果的に親の養育が子どもの情緒的発達に大きな影響を及ぼすことが考えられる。

本研究の課題として、以下の3点が挙げられる。1点目として、横断的データより年齢層の差異について検討していることである。発達段階の特徴だけでなくコーホートの問題も含まれるため、縦断調査が待たれる。次に、調査協力者のサンプリングが偏った可能性である。調査協力者の大半は、都市部の幼稚園に通園する、あるいは子育て支援施設を積極的に利用するなど、比較的子育てや教育に関心が高い家庭や地域の母親であった。3点目として、乳児期の気質測定において1歳時点での様子を母親に回想させたことである。母親からみた子どもの気質は貴重な情報源と考えられる一方で、現在の子どもの行動の影響を少なからず受けていることが推測される。

最後に、本研究では母親の養育態度が幼児期の不安傾向に影響を与えるばかりでなく、子どもの生まれ持った気質からも影響を受けるという母子の相互作用の関係が確認された。それだけでなく、今後は、子どもの不安傾向が親の効力感を失わせ、養育態度に影響を及ぼす方向性についても検討されることが望ましい。

また、幼児期の不安傾向に関連する要因として、夫婦関係などの家庭内要因や母親に対する家族・地域社会の子育て支援体制などといった社会的要因も関連すると考えられ、複雑な変数が交錯する現実を踏まえた、より包括的な検討を行う必要があるだろう。

### (付記)

本研究はJSPS科研費26380922の助成を受けたものである。また、第二著者の卒業論文（平成28年度卒）を基に、第一著者が再分析・構成した。

### 引用文献

- American Academy of Child and Adolescent Psychiatry (1997). Practice parameters for the assessment and treatment of children and adolescents with anxiety disorder. *Journal of the American Academy of Child and Adolescent Psychiatry*, **36**, 69-84.
- Anderson, J. C., Williams, S., McGee, R., & Silva, P. A. (1987). DSM-III disorders in preadolescent children. *Archives of General Psychiatry*, **44**, 69-76.
- Donovan, C. L. & Spence, S. H. (2000). Prevention of childhood anxiety disorders. *Clinical Psychology Review*, **20**(4), 509-531.
- 藤森 秀子・眞榮城 和美・八木下 暁子・菅原 ますみ (1998). 家族関係と子どもの発達 (2) 一 家族関係と子どもの精神的健康について— 日本心理学会第62回大会発表論文集, 272.
- 石川 信一・坂野 雄二 (2005). 児童における不安症状と行動的特徴の関連—教師の視点からみた児童の社会的スキルについて— *カウンセリング研究*, **38**, 1-11.
- 数井 みゆき・無藤 隆・園田 菜摘 (1996). 子どもの発達と母子関係・夫婦関係：幼児を持つ家族について *発達心理学研究*, **7**(1), 31-40.
- Mahler, M. S., Pine, F., & Bergman, A. (1975). *The psychological birth of the human infant*. New York: Basic Books. (高橋 雅士・織田 正美・浜畑 紀 (訳) (2001). 乳幼児の心理的誕生—母子共生と個体化— 黎明書房)
- 水野 里恵 (1998). 乳児期の子どもの気質・母親の分離不安と後の育児ストレスとの関連：第一子を対象にした乳幼児期の縦断研究 *発達心理学研究*, **9**(1), 56-65.
- 森下 順子・森下 正康 (2006). 幼児の気質が母親の行動特徴と養育態度に及ぼす影響 *和歌山大学教育学部紀要*, **56**, 43-50.
- 西出 隆紀 (1993). 家族アセスメントインベントリーの作成 *家族心理学研究*, **7**, 53-65.
- 西出 隆紀・夏野 良司 (1997). 家族システムの機能状態の認知は子どもの抑鬱感にどのような影響を与えるか *教育心理学研究*, **45**, 456-463.
- 西澤 千枝美 (2011). 幼児の不安傾向とその関連要因の検討—改訂版幼児用不安傾向評定尺度の作成— *発達研究*, **25**, 121-134.
- 野呂 正 (1994). 改訂版 発達心理学 財団法人放送大学教育振興会
- Olson, D. H. (1986). Circumplex model VII : Validation studies and FACES III. *Family Process*, **25**, 337-351.
- 齊藤 万比古 (2015). 子どもの精神科臨床 星和書店
- 酒井 厚 (2004). 心配しすぎる親の子はどう育つか *児童心理*, **52**, 22-27.
- 佐藤 俊昭 (1988). 子どもの気質の追跡研究—第2報—日本語版ITQ-Rとその使用経験— *東北大学教養部紀要*, **49**, 175-196.
- 菅原 ますみ・八木下 暁子・詫摩 紀子・小泉 智恵・瀬地山 葉矢・菅原 健介・北村 俊則 (2002). 夫婦関係と児童期の子どもの抑うつ傾向との関連—家族機能および両親の養育態度を媒介として— *教育心理学研究*, **50**, 129-140.
- 杉溪 一言 (2004). 家族機能 氏原 寛・亀口憲治・成田 善弘・東山 紘久・山中康裕 (編) *心理臨床大事典 改訂版* 培風館 (pp. 1241-1244)
- 武井 祐子・寺崎 正治 (2005). 養育者がとらえる幼児の行動特徴に関する研究—1歳6ヶ月検診用気質質問紙とCBCLの関連— *川崎医療福祉学会誌*, **14**(2), 261-266.
- 上村 佳世子・田島 信元 (1988). 発達初期の母子関係と子どもの発達〈その2〉—子どもの気質と母子関係の発達との関連— *日本教育心理学会第30回総会発表論文集*, 180-181.

(2017年9月25日受理)